

トウキユデイデスと史料

桜井 万里子

トウキユデイデスとランケ

古代ギリシアの歴史家トウキユデイデスは史料の扱いに慎重であった。そのトウキユデイデスの姿勢に共感を抱き、歴史研究における史料批判の重要性を強調したのが近代歴史学の祖ランケであった。ペロポネソス戦争（前四三一〜四〇四年）はギリシア世界を二分して二七年間続いたが、この戦争を叙述したトウキユデイデスは史料に対する自分の姿勢について次の様に語っている。

私は、戦争において起こったことについて、偶々そこに居合わせた人から仕入れた情報を事実として記述することをよしとせず、また自分の主観的判断でこれを記述することもせず、自分が目撃者であった場合も、他の人たちから情報を得た場合も、事柄の一つ一つについてできるだけ正確に検討を加えて記述することを重視した。

他の人からのオーラルな情報も、信憑性に検討を加えてから採用した、と彼は言う。彼はさらに続けて、次のように述べる。

トウキユデイデスと史料（桜井）

また、私の著述には神話・伝承が含まれていないため、耳にした際に面白くないと思われるかも知れない。（第一巻二二章二〜四）

これは、後に「歴史の父」と呼ばれたヘロドトスを念頭においてトウキユデイデスが発した言葉であろう。ヘロドトスの史書には神話や伝承が多く含まれていたからだ。神話・伝承をできるだけ避けようとしたトウキユデイデスは、歴史叙述をする際にどのような史料を用いたのか。

アテナイの碑文文化

先に引用したトウキユデイデスの史料に関する見解には、前五世紀に大量に存在していたはずの民会決議や他国との条約などの公文書についての言及はない。そのような文書は参照しにくかったからなのだろうか。いや、そうではない。アテナイは前五世紀に民主政が整備されるにつれ、民会決議や他国との条約（これも民会決議を経ている）や財政上の歳入歳出の記録、神々への奉献品のリストなどを石板（ステレー）に刻み、アクロポリスやアゴラに設置して情報を公開した。したがって、夥しい数の石碑が公文書として公共の場に林立していたはずで、この傾向を現在の研究者は「碑文文化」あるいは「碑文習慣」などと呼んでいる（前野弘志『アッティカの碑文文化―政治・宗教・国家―』二〇〇七、広島大学出版会参照）。

ところが、トウキユデイデスは史料としての碑文にさほど関心がなかったかのように、それへの言及が少くない。例外はもちろんあって、僭主政倒壊の場合もその一つである。前五二七年のペイストラトスの死後に僭主の座を継承した息子ヒッピアスの政権は、前五一〇年に倒壊する。その倒壊のきっかけ



ハルモディオスと
アリストゲイトンの像
ローマ時代の模刻、
ナポリ博物館蔵

ツパルコスの暗殺は僭主政とは関係なく、真相は美少年ハルモディオスに対するヒツパルコスの恋を成就させまいとハルモディオスの愛人アリストゲイトンが策を弄し、結果的に二人でヒツパルコスを殺害してしまっただけだった、とトウキュディデスは語る。僭主政打倒を動機とする暗殺ではなかったことを読者に納得させるために、トウキュディデスはさまざまな説明を試みるのだが、その試みの一つとして碑文を引用する。

このアルコン在任の記念碑をヒツピアスの子ペイストラトスは、ピュティオンの社におわしますアポロンに奉獻す。（第六章五四節）

ただし、この碑文が伝えるのは、ヒツピアスこそ初代僭主ペイストラトスの子であり、その息子（つまり初代僭主の孫）の名がペイストラトスだったことのみで、ヒツパルコスが僭主ではなかったことの証拠としては不十分だが、その論証の一助にはなっている。ここでの碑文使用は、自説の正しさを他者に納得させることを目的としたものである。

となったのは、ヒツピアスの弟ヒツパルコスがアテナイの若者ハルモディオスとアリストゲイトンによって前五一四年に暗殺されたことであつた。この暗殺の動機について、ヒツパルコスは僭主であつたために暗殺されたのだという、事実に対する噂が広まつた。実際は長子であるヒツピアスが僭主だったのであつて、ヒ

トウキユディデスと史料（桜井）

僭主殺害をめぐる神話の成立

ヒツパルコス暗殺は僭主政の倒壊を目指したものでなかったというトウキユディデスの主張は、すでにヘロドトスが『歴史』第五卷五五章で、ヒツパルコスの殺害から四年間もアテナイは僭主の圧制に苦しめられたと述べ、強調していることと一致する。それにもかかわらず、ハルモディオスとアリストゲイトンの彫像がアゴラに立てられ、その後には彼らに対する「僭主殺害者」信仰が確立してしまう。この現象はどのように考えればよいのか。

二人の彫像が設置されたアゴラは、アクロポリスの北西に位置し、かつてヒツパルコス暗殺の現場となった場所で、僭主政倒壊後にアゴラとして建設された。前五一四年の暗殺当時のアゴラはこれとは別で、アクロポリスの東南に所在していた。新たに選ばれたアゴラにハルモディオスとアリストゲイトンの像が設置されたのは、その場所が前五〇八／七年に成立した民主政のためのアゴラとするに相応しい場であることを示すためであった（この仮説については、桜井「空間構造に見るアテナイ民主政成立の背景」『史境』第五四号（二〇〇七年）一〜一四参照）。しかし、当初の意図とは別に、ハルモディオスとアリストゲイトンの像は次第に「僭主殺害者」として信仰の対象となり、ついにはポリスの行政役職者アルコン・ポレマルコスが両者（の像）に供物を捧げるといふ国事に帰結することになる（アリストテレス『アテナイ人の国制』第五八章）。

ヘロドトスとトウキユディデスが真相を書き残さなかったならば、アリストゲイトンとハルモディオスの行動は僭主の殺害という賞賛の対象として今日まで語り継がれてしまっていたかもしれない。幸いなことに、「僭主殺害者」の信仰が過ちであると訴えるトウキユディデスの焦燥感に満ちた叙述は、今

日の私たちに史実の的確な把握を促す役割を果たしてくれている。ところが前述のとおり、ヒツパルコスを殺害したハルモディオスとアリストゲイトンは「僭主殺害者（テュランニキダイ）」とよばれて民主政の誕生を促した功績者のようにみなされ、彫像までアゴラに設置された。恋のもつれが原因の暗殺から二〇年余りで二人は「僭主殺害者」として崇められるようになる。事実が歪曲されて、二人は民主政成立の功労者と目されるようになったのである。僅か二〇年で歴史が作り変えられてしまう一例がここにある。

トウキュディデスの碑文引用

トウキュディデスは叙述を進めるにあたって、ペロポネソス戦争の経緯を理解するため、あるいは戦争のあいだに生じたさまざまな事件の因果関係を究明するために参照したはずの碑文史料については、ほとんど言及していない。その理由としては、叙述の流れを途切れさせないため、などという説明がなされてきた。ところが第四卷一一八〜一九章と第五卷一八〜一九章は例外的に条約や民会決議をそのまま引用している。第四卷では前四二三年の一年間の和約の、第五卷ではニキアスの和約の、碑文に記された条約文をそのまま引用している。この二巻を除いて碑文の引用が稀であるのは、文体の統一を貫くためだったかもしれない。久保正彰氏によれば、これらの条約挿入部分は、トウキュディデスが調査の段階でとりためていた覚書が、未整理のままに史家の最終的加筆修正を見ずしてそのまま公刊されたもの、と見做されている（岩波文庫『戦史』中巻、四五四頁）。この見方によれば、加筆修正は史家の死によって阻まれたことになろう。

トウキユディデスと史料（桜井）

だが、ドイツの碑文学者の一人シユマルジユクは、第四、五巻の碑文の条文引用が、不安定な休戦の数年間が戦争の休止ではなく、むしろ相互不信と対立の継続であったという史家の見解を伝える効果を發揮している¹⁾と述べている（B. Smarezyk, “Thucydides and Epigraphy”, in A. Rengakos and A. Tsakmakis (eds.), *Brill's Companion to Thucydides*, 2vols, 2006, 507）。トウキユディデスには作家としての志があり、また、歴史家としての責務を全うしようとしたため、碑文に記された決議や条文の頻繁な引用を避けたのであって、同時代の歴史については碑文史料を、第一巻の「考古学」のような過去の歴史に関してはオーラルな情報を利用して、とシユマルジユクは指摘する。だがそれでもなお、第五巻の全体に眼を向けるならばやはり、碑文の条文を直接引用している箇所は全体の中でバランスを欠いているという印象を私は否定できない。さらに、他と比べて特異であるという点では、同じ第五巻の「メロス島の対話」もまた際立った特徴を示している。

メロス島の対話

「メロス島の対話」は大国の軍力と「正義」の前での小国の悲劇という観点から、現代の国際政治学の論客の間でも時々言及されるほどによく知られた箇所である。前四一六年にアテナイはエーゲ海に浮かぶ島メロスにアテナイ陣営に加わるよう要求する。なお、メロスはドーリス系であるため、スパルタに近いとみなされていたが、ペロポネソス同盟には参加せず、中立を保とうとしていたポリスである。アテナイの使節は次の様に言う。ここは久保正彰氏の名訳を借用する。

「われら双方は各々の胸にある現実的なわきまえをもとに、可能な解決策をとるよう努力すべきだ。諸

君も承知、われらも知っているように、この世で通ずる理屈によれば正義か否かは彼我の勢力伯仲のとき定めがつくもの。強者と弱者の間では、強きがいかに大をなし得、弱きがいかに小なる譲歩をもって脱し得るか、その可能性しか問題となり得ないのだ。」(八九)

他方、メロス側の代表者は提案する。

「われらを敵ではなく味方と見做し、平和と中立を維持させる、という条件は受け入れて貰えないものであるうか。」(九四)

アテナイの使節は言う。

「神も人間も強きが弱きを従えるものだ、とわれらは考えている。…諸君とても、また他の如何なる者とても、われらが如き権勢の座につけば必ずや同じ轍を踏むだろう。さればこれが真実ゆえ、われらにも神明のはからいに欠くるところがあるうなどと、思い恐れるいわれは見当たらぬ。」(一〇五)

このように「メロス島の対話」はアテナイ側とメロス側の緊迫感に満ちた外交交渉の記録という体裁をとっているが、トゥキュデイデスの想像によるところが大きいとみられている。メロスの代表者とアテナイの使節との交渉はもちろんあったに違いないが、亡命者であったトゥキュデイデスはその場に居合わせることはなかった。それではなぜ、このような対話の描写をトゥキュデイデスは試みたのだろうか。

ペロポネソス戦争開戦時から戦争の推移をメモに執りつつ、国際政治の複雑な展開と過酷な結末の繰り返しを観察する中で、因果関係のもつれた糸を解きほぐす明晰な洞察力と透徹した思考力が練磨された結果、トゥキュデイデスは事柄の本質を見抜く眼を獲得していたにちがいない。残存史料の解釈に慎

トゥキユディデスと史料（桜井）

重でなければならぬことは、「僭主殺害者」像を取上げた際に示してくれたが、さらに、質素を旨としたスパルタの遺跡を後代の人間が見たならば、そこにアテナイに対抗するほどの大国があったとは到底考えないであろう、というトゥキユディデスの言葉（第一巻一〇章）に私は大いに共感するとともに、それを史料の扱いに関する後輩への遺言と受け止めている。歴史家として練磨を重ねたトゥキユディデスは、メロスという小国が大国アテナイの艦隊に包囲されながらも最後まで降伏せずには壊滅し、ほとんどの男性市民が戦死あるいは処刑され、女や子供は奴隸として売り飛ばされてしまったという事実を前にして、そこに非情な政治力学のリアリズムを見てとり、客観的歴史事実を反映させた対話を描こうとした。直接の史料が入手できないなかでトゥキユディデスが描こうとしたのは、歴史的真実だったのだろう。史料の有無は、時には歴史的真実の前に必ずしも不可欠な要因ではないと、この偉大な歴史家は気づかせてくれるのである。

（本学兼任講師）